
俺と勇者と魔王の伝説作り！！

夜秋雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と勇者と魔王の伝説作り！！

【Zコード】

Z5544X

【作者名】

夜秋雨

【あらすじ】

普通の何の力も持たない俺こと黒條白兎は勇者の血を引くクラスメイトと魔界の王の結び目となる。

とある事件を解決しようとする勇者とそれに加担する魔王に襲いかかる魔物達は当然のように俺にも襲いかかって来て つて、完全にじばつちりじゃねえか！！

ストーリー構成と文章力はまだまだですが、できるだけ楽しんでいただけるように書いていきますので、どうぞよろしくお願いします

!

プロローグ 全てはほんの偶然で……

「テメエ！ 待ちやがれ！」

「待てと言われて待つバカはいないつ！」

少年達の喧騒に包まれながら、俺こと黒條白兎くろえだはくとは商店街を逃げていった。

「絶対ぶっ殺す！」

「火炙りにしてやる」

とても怖いお言葉を次々と浴びせてくる少年達は地元でも有名な不良グループ。何度か殺人未遂まで起こしているらしい。

そんな不良グループに何故追いかけられているかと言つて、理由はとても単純だ。

学校帰り。俺はいつもとは少し違う道をフラフラしながら帰つていたのだが、ふと路地裏の入り口を見ると、少女が一人絡まれていた。『ちょっと付き合え』だの『一緒にいいコトしようぜ』だの、いつの時代のナンパだよ、と思つた俺は軽い気持ちで言葉をかけた。

「お嬢ちゃん、俺が遊園地へ連れていくてあげようか？」

……自分で言つといて何だが、それはとても危険な台詞に聞こえなくもない。

「何だテメエ？ 俺たちの邪魔すんのか！」

俺の存在に気づいた不良達はこちらへ振り返り、敵意を剥き出しこする。

「いやいや、邪魔なんて滅相もない」

そう、俺は『邪魔』なんてしに来たんじゃない。

「『妨害』しに来たんだよ」

言葉と同時に、近くにいた不良の鳩尾に一発拳を決める。その不良は呻き声をあげながら、『い、意味一緒にやねえか……』と器用にツツコミながら倒れた。

呆気に取られていた残り一人には記念として顔面にストレートをプレゼント。

そして仲良く二人同時に地面に伏せていったのだった。

「不意打ちが決まつて良かつた……」

正直、喧嘩になつていたら負けていたところだ。我ながら完璧な不意打ちだと思いながら少女の方を見ると、その少女は俺が知つている人物だった。

「結城さん？」

腰まである長い黒髪、端正整つた美しさの中に可愛さも秘めたようなその顔は、間違いなくクラスメイトの結城聖月さんだ。

男に言い寄られていた事もあり、突然声を掛けられてビックリしたのか、結城さんはビクンとしながらこちらを見る。

「く、黒條くん……？」

「絡まれてたのは結城さんだったのか……。絡む奴の気持ちも分かるよ。綺麗だもんな」

と、倒れている不良の肩をポンポン叩きながらそう言つと、結城さんは『や、やめてくれ！ 私は綺麗じやないから……』と顔を真っ赤にしながら、否定していた。

「ま、とりあえず、今の内に逃げておくとこ

そう言つて、俺は結城さんの肩を掴み、道路の方へ軽く押し出す。

「黒條君は帰らないのか……？」

「いや、今からか……と戸惑ふあ……てた……めんとくじいふたけ

「ああ。またな」

笑顔で手を振りながら帰つていいく結城さんを、同じく手を振り返しながら見送ると、俺は路地裏の方へ向き返つた。

そしてふと不良を見ると、最後は岡田一人の内の一人が携帯を握つて誰かと喋つていた。……かなりお怒りのご様子。

「ふむ。さて、俺は今からマラソン大会だな」

そう呟き、路地裏を全速力で後にした。

……と言う」とかあり、今絶賛マラソン中。もう肺が悲鳴をあけているのだが、不良さんが諦めてくれない。

という事で、不良さんたちと話し合いで納得してもらおう。

「よし分かつた！ 分かつたから右向いて帰れ！ 四次元にな！」
「何が分かつたんだ！ 大体四次元ってどこだよ！？」

「みんなの心の中につきつとあるーーもしくは青い猫型ロボットの
何が分か」たゞか ふか四次元 てとこかー

ポケットの中！』

『行けるかあああああ！！！ テメエ、ダチを三人も殴つといて、タダで帰れると思つてんのかつ！？』

『その場の気分でやつた。今だに反省していない。そして俺は悪くない』

『取り調べみたいに言つなあああ！！！』

くそつ！ なぜ納得してくれないんだ！ これだけ必死に説得しているのに！

とりあえず何処かへ逃げ込もうと思った俺は突き当たりの路地を曲がり、その先にあつた細い路地に逃げ込んだ。

壊れかけの自転車やら使われていない鉢植えやらがあつたが、そんな事気にせずに俺は走る。

しばらく走つていると、不良達の声が聞こえなくなつた。

よつやく撒いたか……？ と立ち止まつてみると、そこは異様な空氣に包まれていた。

薄暗い路地裏とは言え、どこかから人の声が聞こえてきてもいいはずだ。だがそこは、この空間が切り離されたような静寂を感じ、暑くなつてきた初夏だというのに妙な寒気、悪寒を感じるのだ。

『何だよここ？ こんなに静かな場所あつたか？』

大体この辺りの地形は把握しており、ここもそれなりに人の声は聞こえていたはずなのだが……。

『とつあえず、さつきの道を帰るか。さつきとこんな氣味の悪い場所は出よー、やつしよー！』

そう言って、俺が来た道を帰ろうとした瞬間。俺の頬を何かが切り裂いた。

「 つ！？」

軽く切り裂かれた頬から、血がポタポタと流れ落ちる。一瞬の事で反応できなかつた俺は、細心の注意を払いながら振り返る。するとそこには『獣』がいた。

いや、獣とは言つても、ライオンやチーターといった『この世に実在する動物』ではない。

この世に『存在しないはず』の動物、ゲームの中にしかいないようなそんな存在。そう『魔物』と呼ばれる存在だ。

その魔物は俺の身長の一、五倍はあるだろう巨大な身長。人間のように一足で地に立ち、狼のようにばつくり開いた大きな口にはあらゆるモノを噛み砕きそうな牙が生え揃つている。体や腕には獣らしく体毛が全身に生え、軍人のような野性味を帯びた筋肉からは屈強さが見てとれた。手に生えた鋭く尖つた爪はあらゆるモノを切り裂きそうな印象を受け、アレにまともに当たれば、今の頬の傷程度では済まないだろう。

「な、何だよコイツ……！」

俺はこの獣の存在を確認した瞬間。この世の見てはならない世界、裏側にある禁断の世界に飛び込んだような気がした。

獣人らしき魔物はその大きな腕を振りかぶり、俺を殺すために一撃目を放とうとしていた。

「くつー。」

左側に跳躍し、その攻撃を避ける。だが思つていた以上の力が出てしまい、着地に失敗した俺は足をくじいてしまつた。

「くそつー。こんな時にドジるとは……！ 所詮俺もドジっ子だつたといふことか……！」

とか自分でも意味不明なことを言いながら、痛みを堪え立ち上がる。うとしたが、次の瞬間、獣の三撃目が目の前を通過し、額から冷や汗が流れおちる。

だが、そこでふと疑問に思った。

（攻撃が定まつてない……？）

確實に攻撃が当たる距離にも関わらず、さつきから一撃も直撃していない。

注意して見ると、獣の口からはヨダレがダラダラと滴り落ち、目は血走つてこちらを直視できちゃおらず、ただ本能だけで俺を襲つている感じだ。

それなら、と近くにあつたビール瓶を少し離れた壁に投げつける。壁に直撃したビール瓶はガシャアーン！ と大きな音を立てて砕け散つた。

すると獣の注意はソチラへ向き、俺はその隙に獣のいる方向とは逆方向へ脱兎のごとく走る。足がかなり痛むが関係ない。

息を切らしながら数分走り、振り返つてみるとそこに獣はいなかつた。

「ハア……ハア……に、逃げ切つたのか……？」

あ、危なかつた……。それにしてもさつきの獣は何だつたんだ？ ひと安心し、近くの壁にもたれ掛かつた瞬間。

ドゴォオオン！ と大きな音を立て、すぐ隣の壁が弾け飛んだ。

「なつ……？」

とつさに身構えた俺だが、すでに時遅し。
獣は大きく腕を振り上げ、俺の顔面目掛けて振り下ろされた。

「ぐつ ！」

来ない。

先程振り下ろされた腕が来ない。

俺は少しそつ目を開けていくと、そこには一人の少女が立っていた。
美しく靡く長い黒髪。俺の通う高校の女子制服から見える手足はスラッシュと長く魅力的で、相手が異性同性関係なく魅入ってしまう。
そんな凛とした雰囲気を纏う少女の手には少し大きめな剣が握られており、その剣で少女の一倍の身長はあるだろう獣を真つ二つにしていた。

「すまない。黒條くんを危険な目に遭わせてしまった」

そう、俺はその少女を知っている。

「ゆ、」

クラスメイトであり、学校で人気ナンバーワンの女子生徒であり、
そしてさつきナンパから救った少女。

「結城さん！？」

「すまなかつた。黒條くんを巻き込む気は無かつたのだが……」

そう言つて結城さんは剣を背中の鞘になおしながら、俺の方へ近づ

いてくる。といふか、結城さんが何でこんな化物と……？

「何故、私がこんな化物と闘っているのか分からぬ顔をしているな」

「あ、ああ……」

心中を見透かしたよひに言ひ結城さん。そして重たさづて口を開こうとしたその瞬間。

ビッシュヤアアアアン！ といつ電が近くに落ちたよひな音と共に、辺りが一瞬で暗くなる。

「ツ !？」

「な、なんだ！？」

田の前の空間に地割れのような亀裂が現れる。その亀裂は徐々に開いていき、そこから重々しい空氣と闇が溢れ出す。

『フン、派手にやったもんだな？ 勇者様？』

凜々しさ溢れる声にも関わらず、ふざけたよひな口調をした男が亀裂の中から現れる。

黒マントを羽織り、奇抜なファッショソをしたその男はまるでワイヤーで吊るされているかのよひにゆくべつと降りてきた。

「その声は魔王か」

結城さんはその男を知つてゐるらしい、頬に冷や汗を流しながらじつと男を見ていた。

「魔王！ 何故、この世界に魔物を放つた！？」

声を荒げながら皿の結城さんを少しずつこなしてしまった俺。情けねえ……。

「俺が放つたんじゃねえよ。最近おかしくなった魔物が増えてきてな……。俺も困つてんだ」

真つ一につにされた獣を見ながら、魔王と呼ばれた男は話す。

「まあ、ここはもう一度回収しておくれからよ。もう怒るな

そつ言つて、魔王は獣の死骸を持ち上げると、『じゃあな』と書いて再び亀裂の中へ入ろうとした。だが……。

「……あれ？ おかしいな。扉が開かねえ」

パスワードを間違えたようなリアクションをしながら慌てふためく魔王。……おい、何やつてんだ魔王。今、かつてよく帰らつとしたじやねえか。

「畜生！ だからメンテナンスとけって言つたんだよ！」

「……結城さん。魔王ってあんなにカッコ悪い奴なの？」

「……いや、そんなことはないはずなんだが……」

結局三〇分くらい格闘し、ビクともしない亀裂に痺れを切らしたらしい魔王は、

「おい、そこの人間」

「……ん？ 俺か？」

「さうだお前だ。この扉が直るまでお前たちに住まわせろ」

「なあああああっ　　！？」

これが一般人だった俺と勇者の血を引く結城さんと魔王による物語の始まりだった。

第一章（1）　自宅に魔王が住んじゃった！？

結城さんのもう一面と魔王に出会った日の次の日。魔王は俺の家の居候となっていた。

現在、ウチのリビングで目玉焼き、味噌汁、白ご飯、サラダという朝御飯定番メニューを食っている。

「いやあ、やっぱ人間界の飯はつまいな！」

……人間界に溶け込みすぎだる。こいつ本当は人間じゃなかろうか？

「お前人間界に溶け込みすぎだろ……？ 服まで人間のもんにってるし……」

昨日は黒マントに王族が着るような豪奢な服を着ていた魔王が、今は白いTシャツにジャージのズボンといういかにも人間だ、という服装をしていた。

「気にするなよ。ハゲるぞ」

「それくらいでハゲる訳ねえだろ。バカ魔王」

「んだと？」

「あらあら。喧嘩しないのよ」

今のやり取りを喧嘩と思ったのか、一人の女性がキッチンからやってくる。

両手に持つたおぼんでお茶を運んできたのは、俺の母さんこと黒條陽子だ。

もう四〇歳近いにも関わらず、大学生に近い容姿を持ち、近所の奥

さん達から羨望の眼差しで見られている。

いつも見ている家族の俺が見ても一〇代に見えてしまつから不思議でしようがない。

「別に喧嘩じゃねえよ」

「あら、お母さんにそんな言い方して……。チューするわよ?」

「ハイイツー? ちよちよちよつと待て母さん!! 頭は大丈夫か

!—」

「バツチリ、イエーイ!!」

「もうダメだ……!」

おーい、ここに手遅れの精神疾患の方が一人いるぞー。

そんな心の声など気にすることもなく、母さんは魔王に料理を出していく。

一回、二回、三回、と増えていく食事に俺は思わず声を出す。

「出しそうだろー!」

「イケメン君、いっぱい食べててくれるからー!」

「ああ! まだいけるぜー!」

「…………。まあ、それは分かった。でも何で快く居候させたんだよ?」

あの出来事の後、俺と魔王の一人で家に帰り（家に帰る俺に堂々とついてきた）、母さんに事情を説明（家出というウソの事情）すると、『ここに住みなさいー!』と魔王を即刻住ませた。

ちなみにイケメン君というあだ名は見た瞬間から呼んでいる。

「とつてもイケメンでおいしそ コホンッ、可哀想でね……」

「おーい、今『おいしそう』って言いかけたよな!? 危ないぞコイツ……!」

「おいためー！ 母親の事を『コイツ』呼ぼわりすんじゃねえ！！」「そ、それは悪かった……。だがとんでもないことを言つたのは事実だ！」

「言つてねえ！」の人は何も悪くねえ！！ ちょっと口が滑つただけだ！」

「認めてんじゃねえかよ！」

喧嘩の元凶となつてゐる母さんは「あらあら、私の為に喧嘩しないでね」とか言いながら、リビングからキッチンへと引っ込んでいつた。

「大体、お前本当に魔王なのか！？ 全く魔王らしさを感じねえぞ！？」

あんな次元を裂くような登場をされたから、魔界の存在は認めざるをえないが、人間界への適応力高すぎるだろ！？ 本当に魔王なのか疑わしいコイツに確認を取る。

「ちゃんとした魔王だ！ 見ろ！ この証明書を！」

そう言つて俺に見せてきたのは履歴書のような一枚の紙。
……ふむ。『レイエス＝ルシファー』か……。今初めて名前知つたよ。

つてか

「名前しか読めねえよ…」

名前以外は象形文字のよつた記号が並び、何が書いてあるか分からぬ。

「ああそつか。名前以外は機密事項だつた

……「イツ、正真正銘のバカだろ。

「またイツに怒られるぜ……」

「イツ？ 魔王を叱れる奴なんているのか？」

「あ、ああ……。まあ、なんと言つか……、俺の婚約者なんだよ……。俺は認めてねえがな」

「イツ、婚約者なんていたんだな。半ば強制的みたいだが。

「つてか、魔界も人間界と変わらないんだな」

「ああ、お前らと姿形こそ違う奴もいるが、心だけは変わらねえ」

何かの自信を持つてそう告げたルシファー（「これからいつ呼ぼう）はふと一瞬、寂しそうな顔を見せた。

「じゃあ、その婚約者のことも認めたら 」

「嫌だ。絶対認めねえ」

強情なやつめ。

「あら……。イケメン君、婚約者いるの……残念ね……」

「おい。いい加減にしろ」

いつの間にかキッチンから顔を覗かせていた母さんの言葉に、思わずツッこむ。

ツッこまれた後、非常に残念そうな顔を浮かべ、ルシファーが食べ終わった後の食器を持って再びキッチンへ帰つていった。

……自分の母さんながら危ないんじゃないか？ と思わなくもない。

「あ、そつ言えば」

「なんだ？ 何かを思い出したのか？」

ルシフラーが何かを思い出したような声を上げる。
何かを婚約者に頼まれたりしたのだろうか？
案外こいつも良いところあるのかも

「さつきの紙を見た奴は処刑、ってジジイが言つてた気がする」

前言撤回＆この少しの間に俺の命が危なくなつた。

第一章（2） 勇者と魔王が手を組んだ！

朝飯も終わった俺は家にルシファーを残して、学校に行く道を登校していた。

ルシファーの放ったわざの一言のせいで周りをキョロキョロと見回してしまつ。

（それにしても、魔物が俺たちと変わらない心を持つてるなんてな……）

昨日に襲われたあの狼のような獸からは全くそんなことを感じなかつた。

感じられたのは田の前を動く物体を潰す、といいつような異常な破壊衝動だけ。

あの獸だけが特別おかしかつたのか。
それは俺には確認できない。

「黒條君！」

考え方とに耽つている俺に誰かが話しかけてきた。

声のした方を見てみると、走ってきたのは結城さんだつた。

「おう、結城さん。今朝の調子はどうだ？」
「どこも変わって異常はない。黒條君も大丈夫か？ 魔王と住んでいるんだろう？」

自分の宿敵と住んでいる俺を心配してくれる結城さん。いい人だな

……！

「いい人だな……！」

「えええつ！？ ぐ、ぐろえだや君！」

「ん？ 僕が何か言ったか？」

「な、ななな何でもないぞ！？ うん、何でもない！」

「？」

よく分からぬが、何かに顔を真っ赤にして顔の前で手をバタバタ振る結城さん。

あと俺は聞き逃さなかつたが、確實に今、結城さんは俺の名前を囁んだ。

……俺の名前など正しく発音する必要もない、といふことだらうか……？

「まあ、今のところ俺も異常無し。あいつの環境適応力はすさまじいもんだよ」

「それなら良かつた。あの魔王の先祖は遙か昔に天界を追放された墮天使ルシファーアだと聞いていたからな……」

「ああ、それで『ルシファーア』って名前が付いてんのか」

「そうだ。ルシファーア家は魔界でも屈指の強さらしい

「へえ……」

会話が途切れ。

ふと、結城さんを見ると何やら俯いて何かを口にもつていた。

「ど、どびついたんだよ、結城さん！？」

「……く、黒條君は軽蔑したりしないか……？」

「軽蔑？ 何を？」

「わ、私が……その……あんな魔物と鬪つてることを……」

「尊敬はしても、軽蔑はぜつたいにしない。カッコいいじゃないか

！ 世界を守る勇者なんて！」

と言つた瞬間。

何故か結城さんは悲しげな顔をした。

すぐに元の表情に戻つたが、俺の頭にはむつきの顔が焼き付いて離れない。

「結城さん、本当は」

「さあ、もう学校だ。早く行こう！」

俺の手を引つ張りながら、結城さんは学校への道を進んでいく。

「くそかつたりい……」

現在、授業は四時間目。

淡々と続く古文の授業。すでに俺の耳は念佛として捉えてるらしく、全く頭に入つてこなかつた。

しかも、もう腹が減つて仕方がない。マジで早く終わつてくれないかな……。

ふと時計を見ると、授業が終わるまで残り一〇分。もうすぐじやないか！

さあ来い早く来い終われ終わるんだ！と思つて時計をじつと見つめるのだが、なかなかに時計の針は動いてくれない。

「はあ。暇だな」

暇なので、結城さんのほうを見てみると、さすが優等生。ちゃんと

先生の話を聞き、ノートを取っていた。「うん、偉い。

そしてそのまま見つめること三分。見つめすぎて自分が危ない奴か
と思えてきたよ……。

先生の声をボーカルと聞いていると、突然教室にガチャン……とい
う大きな音が鳴り響いた。

が、それをクラスメイトが気づいている様子はない。唯一気づいて
いるのは

「（結城さん！）」

結城さんはその音に気付くと同時に席から立ち上がり、教室の窓か
ら校庭へと飛び降りた。ってかここ三階だぞ！？

だがそんな出来事もみんなは気づいている様子がない。

慌てて窓から外を見ると、校庭に対峙している三つの影があった。
一つは先ほど飛び出していった結城さん。前に見た少し大きめの剣
を持っている。

それに対するように反対側にいるのはドラキュラのよつな黒いスー
ツを着た男とカラスを人としたかのような魔物だった。

俺も慌てて教室を飛び出し、階段を駆け抜け、靴を履きかえること
もなく校庭に出る。

「結城さん！ 僕も力になるぜ！」

「黒篠君！？」

「ただの人間！」ときがこの結界に入るとは

ドラキュラはニヤリと笑いながら、こちらを見た。

「結界……？」

「そうです。今結界が張られた場所で動けるのは限られた人間のみ
！ 例えばその勇者とか、ですかね」

そつ言つて、ドラキュラは俺から視線を移し、結城さんを見る。

じゃあ、なんで俺は動けるんだ……？

と言おうとしたところで、先に結城さんが口を開いた。

「……黒篠君。ここは逃げてくれ。君を守り抜ける自信はないんだ」

「大丈夫だ。自分の身は自分で守る」

「だが……！」

結城さんが何かを言う前にカラス人間のほうが我慢できなくなつた
かのように襲いかかってきた。

大きな黒い右翼を上に構え、俺の元へ一直線に走つてくる。ヘン、
こんなの単純

「黒篠君！ 足だ！」

右の翼を上から下へ振りぬいたかと思うと、その勢いを利用し、空
中で前転のように一回転。

そして伸ばされたカラス人間の足が俺の脳天に直撃した。

「ガ ッ！？」

前転の勢いを利用していたこともあって、重い砂袋を上から思い切
り投げつけられたような衝撃が脳天から足へと走り、激痛が遅れて
全身を駆け抜ける。

そんな衝撃に普通の高校生である俺の体が耐えられるはずもなく、
あつという間に地に這いつぶばつてしまつた。

「ぐううう……！」

視界は揺れ、口からはうめき声しか出ない。

体は動かず、指先にすら力が入らない。体と意識が離れてしまったみたいだ。

少し前のまでは結城さんが魔物一体と戦っているのが見える。だが何もできない。

くつそおおおおおー　俺には何もできないっていつのよおおおおーー

ただ這いつくばる」としかできない俺は、自分の無力を、弱さにただただ歯を噛み締めることしかできなかつた。

そんな時。

「雑魚はソコで寝てる」

聞き覚えのある声と黒い豪奢なコート。その一つでやられるのが誰かすぐに分かつた。

俺んちの飯をたらふく食いやがつたアソブ。俺の母さんこ妙に気に入られているアソブ。

そうアソブは

「ル……ルシ……ファー……?」

俺の意識はそこで途絶えた。

「フン、アイツは氣絶したか」

ルシファーは自分の後ろで倒れている黒篠に手を向けてそう言った。

「おい勇者。お前はアイツの看病をしている」

「ど、どういうつもりだ……？ 私と戦うつもりじゃないのか？」

そう、勇者と魔王は本来敵対関係にあり、勇者と魔物一体が戦っているこの場では魔物側につくはずである。が、それを魔王ルシファーは否定する。

勇者である結城聖月と共に闘する、と言っているかのようだ。ただの人間である黒篠白兎を助けるために。

「多対一は趣味じゃねえし、居候の家主であるそいつに死なれちゃ困るからな……。ほらさつさと行けよ」

聖月は「クリと頷くと、黒篠を抱えてどこかへ飛び去つて行つた。その様子をじつと見ていたドラキュラは目と口を引き攣らせ、血走つた目で激怒したようにルシファーを見る。

「み、見損ないましたぞ！ あんな勇者に手を貸すなど……！ 魔界の歴史上、最大の汚点です！！」

横にいるカラス人間も同意見らしく、同じような表情をしながら激怒していた。

「最大の汚点？ それはだな」

ルシファーの言葉がドラキュラ達の耳に入った瞬間。すでにルシファーは一人の後ろにいた。

それに気付いた時、ドラキュラ達は後悔した。
喧嘩を吹っ掛けた相手を間違つたのだと。

もう少し冷静でいなければならなかつたのだと。

だがもうすでに遅い。ドラキュラ達には見えなかつたが、一人の体
はルシファーの放つた魔弾をともに受け、それに気づいた瞬間に
彼らは肉片一かけらも残すことなく消滅した。

「お前らのことだろ……」

悲しげに言つるシファーの声が校庭に虚しく響いたのだった。

第一章(3) 後輩登場。でも立場逆!

「「ううん……」

ふと田を開けると、田の前には心配そうに覗き込む結城さんの顔があつた。

後頭部には暖かくて柔らかい感触。

俺今、結城さんに膝枕されてる？ あの男性の憧れの？

……はーん、これは夢だな？

田が覚めるとルシファーの顔があつて、『うわああああ……』ってオチだろコレ。

なら、今の内にこの感触を楽しんでおう。

…………。

「アレ？ 田が覚めないな……。

ううすらりと田を開けてみる。やはり結城さんの顔がそこにはあつた。

「あ、結城さん？ 俺今、膝枕されてる……の？」

恐る恐る聞いてみると、結城さんはトマトのように顔を赤くして、慌てふためきながら『い、いや違うんだーーー』にこには地面だかいと黙つて……と何故か言い訳みたいに言つてこた。

「あ、ややかの体験をあつがとつぱれこます……？」

そう言いながら、慌てて結城さんから離れる。

ああ……。気持ち良かつたな……！ 結城さんの膝枕……！

「田、覚めたのか！？」

突然後ろから話しかけられた俺が振り返ると、そこにはルシファーがいた。

……ああ。そういえば、俺は「マイツに助けられたんだよな。

「ありがとう。そして『めん』

「感謝と謝罪はそこ」の勇者様にしろよ。お前を安全な場所に運んだのは「マイツだぜ？」

ふと、結城さんを見てみると、俯きながら顔を真っ赤にしていた。
……なんで戦うときはあんなに凜々しいのに、普通の時はこんなに照れ屋なんだ！ 可愛すぎるー！

「結城さん、『めん』。そしてありがとう」

「い、いや私は普通の事をしただけだ……！ ……でも迂闊に魔物の前に出るのは危険だから、それだけはやめてくれ」

「ああ……。今度は気を付ける」

「い、『今度は？』」

予想していた返答と違つたのか、結城さんは驚いた表情を浮かべる。

「あの時の俺は本当に迂闊だつた……。でもあと一回戦えば、何かがわかる気がするんだよ」

「黒條君……」

「フン、雑魚のお前に何が分かるのか、楽しみだぜ」

ルシファーは何か楽しそうな表情を浮かべながら、フェンスの上に立つ。

そして「じゃあ、俺は家に帰るからな」と言い残し、この場を去つていった。

「自分の家みたいに言つたじゃねえ！――」

その叫びが聞こえたかどうかは定かではない。するところが、学校中にチャイムが鳴り響いた。

「ところで結城さん」

「ん？ 何だ？」

「今何の時間？」

携帯を胸ポケットから取り出した結城さんは現在の時間を確認する。

「今ちょうど五時間目が終わつた所だ」

「何だとおおおおおーー？」

せ、せつからく楽しみにしていた飯の時間が……！

かなりのショックを受けた俺は結城さんの手を引っ張り、とりあえず教室へ戻りつとダッシュしたのだった。

「で、何で黒條先輩は五時間目に体育館にいなかつたんですか！」

「これは何かの間違いだ。

誰もまさか俺が放課後に自分の教室で後輩の女子に怒られるとは夢にも思つまい。

五時間目は体育館で緊急の集会だつたらしく、全学年合同だつたらしい。

その時に俺の姿を探していたらしいのだが、見かけなかつたため、こうして放課後に俺の教室へとやつてきたらしい。

……何で俺を探す必要があるんだろうか？

ちなみにこの女子は風紀委員の雨音紗季さんあまねさきだ。

黒髪のショートヘア、顔はアイドルっぽく、生徒達の間では可愛いと評判らしい。

体つきはスレンダーで綺麗なラインを描いている（上半身の一部分除く）。

「今、先輩を怒らなくちゃならない気がしたんですけど？」

「き、気のせいだ」

後、妙に勘が鋭い。これが女の勘つてやつだろうか。

「とにかく、なんで五時間目に体育館にいなかつたんですか？」

「い、いや、それはだな……？ ち、ちょっと用事があつて……な？」

「用事つて何ですか！？ あ、もしかして結城先輩と何かしてたんですねか！？ 屋上で黒條先輩と結城先輩が一緒にいるところを見た人がいました！」

え？ 話が変な方向に進んでない？

「全く……、学校で不純異性交遊だなんて……！」

「ちちち違つに決まつてるだろ！？ 何でそういう方向に話が進んでんだよ！？」

「私の友人が見たからです！」

と言つと、教室のドアから一人の男子生徒が入つてくる。
ソイツは俺の後輩の櫻葉智さくらばさちだつた。

すこしキャラついた茶色の髪に、耳にはイヤリングを装着。
顔は近所で話題になる程にイケメンで某事務所のアイドルに匹敵すると専らの噂。

学校の制服をかなり着崩しているのだが、風紀委員のおどがめは全くない。

雨音さん、怒るならまずアイツだらう。
でもそんなアイツと友達、といつのだから不思議だ。

「ブ。先輩が後輩に怒られてるなんて……！」

あの野郎……！ 後で絶対ぶん殴つてやる……！

「つてか、あいつは何で五時間目に屋上にいるんだよー!?」

「俺の直感力を侮らないでください！ 好奇心のすぐられるところならどこでも現れます！」

「パパラッチか!!」

大体、俺たちがどういう関係かといつて、かつて言つていた通り、先輩・後輩の関係であつてゐる。
だが、雨音さん達が入学してきて一日後にあつた、とある事件がきっかけで彼らと話すようになった。

その日、俺は先輩に呼び出され、校舎裏に向かつていた。
呼び出された理由はおそらく、その当時に荒れていた俺の態度が気

に入らない、といつて普通の理由だろう。

『全く、俺に構う暇があつたら勉強しろよ』

とそんなことを言いながら校舎裏に着いた俺。

さつさとやつてさつさと帰ろうと思つて顔を上げると、俺の視界に飛び込んできた光景は許せないものだった。

一〇人くらいの不良が二人の男女に暴力を振るつていた。いや、一人の男子が女子を庇い、全ての攻撃を一身に受けていた、というのが正しい。

男子は全身痣だらけになつても、口から血を流しても、女子を庇い続けている。

『おー、お前ら何やつてやがんだ！…』

その言葉で俺がいることに気づいたのか、不良達の視線が一気にこつちに集まつた。

『おー、テメエが調子に乗つてるつていつ グボエ！？』

話を聞く気になんてならなかつた。

ただただ、目の前の不良達が気にくわなかつた。

まず前に出てきた先輩らしき不良を殴り飛ばすと、次に近い生徒から殴つていく。

途中、どこから持つてきたのか分からぬ鉄パイプやバットで全身を強く殴られたが、痛みなんて気にもならなかつた。

そして気がつくと俺は血まみれになつて、倒れている不良達の中心に立つっていた。

『ちつ、不愉快なもん見たぜ……』

足を引きずりながらその場を去ろうとした俺の顔にあるものが映る。庇われていた女子が、その庇ってくれていた男子を運ぼうとしていたのだ。

『私がこんなところに来たばかりに……！　ごめん……！　本当にごめんね……』

後に聞いた話だが、女子が不良達の格好を注意した事で、こんなことになつたらしい。

泣きながら運ぼうとするが、やはり女子が男子を運ぼうとするのは無理があり、少し持ち上がりへりへりだった。

『はあ……』

見かねた俺は女子に近づく。

女子は俺に驚いていたが、俺は気にせず男子生徒を背負い、そのまま保健室にむかつたのだった。

ちなみに保険医には『両方とも病院に行つてもらひから』と抵抗するまもなく、俺も病院に送られた。

その時の一人がこの後輩たちである。

『で、先輩。聞いてます？』

『ごめん。全く聞いてなかつた』

と言った瞬間殴られた。

「全く……、あのかつこ良かつた先輩はどこへ行つたんですか……」「お空の星になつたよ……」

ゴスゴスと頭を殴られる。意外と痛いんだけど……。
そんな時、教室のドアがガラツと開く。

「何だ。黒條君まだ残つていたのか」

頭を擦りながら顔を上げると、そこには結城さんがいた。

「結城さん！ 助けて！ この暴力娘が つていだつー？ 肘

で殴るなよ！」

「先輩が悪いです」

「そうだ先輩が悪いな」

「んだとー テメエら先輩に向かつてなんて態度を

「ふふ、黒條君つて本当におもしろいな」

わ、笑われたつー？ ダメだもつ俺、立ち直れない……。

「結城先輩！ 黒條先輩と屋上で何をしていたんですか！」

最初は何を言われているのか分からぬ顔をしていた結城さんだが、少しすると理解したのか、顔がボツと赤くなり、突然拳動不審になつた。

「げ、幻覚を掛けていたはずなのだが……！」

小さな声で何かを呟いた結城さんだが、その言動はより疑惑を

深めていく。

「やっぱり何かあつたんですね！？」

「い、いや、なんにもないっ！？ 何もしていないから…」

怪しそうな結城さんをジロツと見ていた兩音だが、「まあ、結城先輩がこんな先輩と何かあるわけないですよね」と言つて、なぜか俺の心に深い傷跡を残していく。

「黒條先輩、結城先輩」

櫻葉が突然口を開き、ある提案をした。

「せつかく四人もいるんですから、今からボーリングでも行きませんか？」

「ボーリング！？ うん行こう行こう… 黒條先輩は強制ですからね！」

「選択権無しかよっ！？」

どうやら後輩一人は行く気満々みたいだ。

まあ、俺も楽しい企画には賛成だから行くけどな。

「わ、私はやつたことないんだが… 大丈夫かな…？」

「大丈夫！ 俺が手取り足取り ゴブア！ いちいち肘で殴つてくれるな！」

「セクハラ発言は禁止です

「なら暴力も禁止だッ！」

この後、結城さんも承諾し、四人でボーリング場へ行くことになった。

第一章(4) 心休まる場所と新たな問題

有名なボーリング場に来た俺たち四人。ここにはボーリングの他にもカラオケやホッケー等、様々な娛樂施設が揃つてあり、飽きることがなく遊ぶことができる。さつそくボーリング場の受け付けに向かつた俺たちだが……。

「(イ)利用は五名様でよろしいですか?」

「……ん? 『五』名様? よし、人数を確認してみよう。まずは俺。そして結城さんに、後輩の雨音と櫻葉。そんで持つてルシファーーと……。え? ルシファーー?」

「何でお前がいるんだよ!?」

しつつとこのメンバーに入つていたルシファーに思わずツッこむ俺。いつの間に紛れ込んでやがったんだ!?

「俺の直感が楽しそうな気配を感じ取つたからな! 俺も来てやつたぞ!」

どんな直感だよ!? まあ、人数が多い方が楽しいし、良しとしておこうか。

こうして一人を追加し、ボーリングを開始した。

「よし、誰から投げるんだ?」

「じゃあ俺からこきますよ」

後輩の櫻葉が球を持ち、レーンの前に立つ。

「これがボーリングか！ 早く俺もやりてえ！」

「ちょっと待て！ これは順番だ！」

球を持って、違うレーンで投げようとするルシファーを俺が抑止する。

「じゃあ、行きますよ！」

櫻葉が放った球は、綺麗なカーブを描き、真ん中のピンへと直撃。そこを起点としてすべてのピンが倒れた。

「つまいな櫻葉！」

「まあ、たまに家でやりますか？」

そういうえば、櫻葉は櫻葉財閥のお坊っちゃんだったな。家にこんな設備があるなんて、どんな家だよ。

「じゃあ、次は俺だから！」

球を振り回しながらレーンの前に立つルシファー。
あいつ、本当に楽しそうだな。

「黒條先輩、あの人は誰なんですか？」

雨音は隣のピンをすべて倒すという迷技を繰り出したルシファーを指差し、俺に訪ねてきた。

まあいきなり参加してきた奴だし、誰なのか分からないと不安だろ

うから教えておくか。

「ああ、あいつはルシファーと言って、海外から越してきたやつなんだ。今は俺ん家に居候してるけどな」

「ふうん、そうなんですか……。面白い人ですね！」

「まあな。日本に来たばかりだから少し日本人とは違う行動をする
から、ソレがハナダ、三三はアソニウツ一二、九

「そうですね。今も違うレーンでボーリングをしてるのは、まだ
「かもしけない」とそこには詰めてやってくれ

慣れてないからですよねー」「

「？」

違う方向を見ている兩音の視線を追つと、そこには違う密達のレンでボーリングをするルシファーの姿が。

少し子供を怒つて いるみたいで、他人の目が恥ずかしかった。

「これが次は結成されるの翻訳だ。」

「あ、うん。そうだな……！」

俺はスペアといつ平凡なスコアで終了し、次は結城さんの番となつた。
不安そうな顔でレーンに立つ結城さん。確かにボーリングは初めて
だつて言ってたけど……。

今までの俺たちの動きを真剣に見ていたのか、俺たちを真似したかのようないつもフォームで球を投げると、中央のピンに吸い込まれるようにな球が曲がり、見事ストライクとなつた。

「は、初めてでここまでは……すげえよ結城さん！」「いや！ みんなの真似をしただけだからっ！」

と謙虚に照れる結城さんはとてもかわいく見えた。

「よーし、私もストライク取りますよーー！」

「頑張れよ！ 紗季！」

桜庭の声援を受け、雨音がレーンに立つ。アイツはかなり上手そうだな……。

「行くよー エイツー！」

大きく振つて投げた球は一メートルも進まないつむにガーターへ。
……「いめん。俺こんな時のリアクション知らないいや……。

「……先輩？」

「ん、んん？ な、何だ？」

「今私の投球どうでした？」

ヤバい。今少しづつ爆弾が近づいてきている……！ 下手なことすれば、一回でドカーンだ……！

「う、うん！ い、今度はもう少し頑張るわー！」

そういつた瞬間。俺の顔面にアイアンクローラーが炸裂した。

「元気を取り直して行こう。」

元気いっぱいの雨音の声。

端っこで倒れている俺を無視して、ボーリングが再開される。

この状態の俺を無視できるって、どんな神経してるんだよ……！
ずっと倒れているわけにもいかないので、顔を擦りながら立ち上がる俺。

すると、結城さんが濡れタオルを用意してくれていた。

「大丈夫か？ 大変だな黒篠君も……」

「まあ、アイツらが楽しいならそれでいいんだけど、物理攻撃はやめてほしい……」

いや、まず攻撃をやめてほしいと言つべきかこゝは。

「私もこんなに楽しいのは初めてだ。ぐ、黒篠君も一緒にだしつぶやく？」

最後のほうが聞こえなかつたのだが、結城さんも楽しんでくれているみたいで何よりだ。みんなが楽しめなかつたら嫌だもんな。
そういうば、さつきからルシファーの声が聞こえないんだが、アイツはどこに行つたんだろうか？

あたりを見回ると、少し離れたところでボーリングの球をタワーのよつに積み上げている奴が一人。

「おい、何してんだ」

「ちょっと待て……、あと一球で一〇段だ……！」

そつと球から手を放すと、見事一直線にそびえ立つボーリングタワー

一が完成した。おめでとう!
……じゃなくて。

「人様に迷惑かけるな。そんで自分で片付けるよ」

冷たく言い放つた俺の言葉にルシファーは渋々球を片付けていた。
……当然の代償だぞ。

そして時間は進み、ボーリングを終了した俺たちはこの施設の中に
ある他のゲームで遊びまくった。

「勝負だ勇者!」
「受けて立つ!」

と卓球で勇者対魔王というある意味ラスボス戦っぽい対決や、カラ
オケで櫻葉と雨音が意外な美声を披露したりする内にあつという間
に帰る時間となつていった。

「あ～今日は楽しかつた! 結城先輩! 黒篠先輩! また一緒に
行きましょうね!」

「ああ。手持ちに余裕があつたらな」
「まあ、余裕がなくとも誘いますけどね」
「櫻葉……、お前が余裕あるからつてな……」

呆れたように呟つと、雨音と櫻葉は「それじゃあ」と挨拶して帰つ
ていった。

「結城さんは楽しかつたか?」

「ああ。すぐ楽しかつた!」

満面の笑みを浮かべ、結城さんは心から楽しそうな声を出す。

その言葉を聞いて俺はホッとした。毎回あんな戦いを繰り広げている結城さんは、きっと心が休まる場所がなかったはずなのだ。まあ、それは俺の勝手な意見を言つただけかも知れないけど、それでも結城さんにほこりついた場所を作りたい、と思つて後輩の誘いに乗つた。

それが成功して本当に良かつた……！

「で、ルシファーはどうだったんだ？」

「ん？ ああ、俺もすっげえ楽しめた。礼を言つておく

コイツが礼を言つなんて珍しいな。まあ、楽しかったみたいだしそれは喜ばしいことだ。

「じゃあ、私はこっちの道だから……」

「おひ。気を付けて帰れよ」

「ああ。黒條君も」

違つ道を歩いて帰る結城さんに手を振り、俺とルシファーは家へと帰るのだった。

「で、これは何だルシファー……？」
「い、いやこれはだな……？」

家に帰宅した俺の目に飛び込んできた光景は散らかりまくつたリビングと、その真ん中に座る一人の少女だった。

髪の両側をリボンで結んだ、ツインテール少女はスタンダードなメイド服を着て、俺たちにこう言つた。

「おかえりなさい。ア・ナ・タ?」

これはまた問題が一つ増えたのかも知れないな。

第一章(5) 危険なメイドと村人の信念

ボーリング場でみんなと遊んだ次の日。

「早く起きてください」と「起きないと……」

力チャヤ、となにか黒光りする危ない物体が俺の額に当たられる。
冷たいソレは、とあることをすれば、一発で俺を昇天

朝から俺は命を狙っていたのだつた。

「で、何なんだよ」「イツは……」

俺のこめかみに危ない代物をずっと押し付けているこのメイドはなんなのか。

リビングで朝飯を食つていたルシファーに話を聞くことにした。ちなみに母さんは朝早くに飯だけ作つて出掛けていった。

「んあ？ そ、そいつは俺の
「お前の？」

何かを言おうとして口もむ。何だ、なにか言えない」ともあるのか。ところが、やれと叫つてほし。じやないと俺の頭から

一禁的なモノ出して、昇天しちゃ こいつだから。ほりほり「メメティ
からホラーになっちゃうぞ

「そいつは

「私はルシファー様の婚約者です」

可愛くウインクしながら言つメイド。いや可愛くねえよ。姿だけな
らしいけど、手にソレがあるとな.....。『鬼に金棒』はよく聞くけ
ど、『メイドに（自主規制）』は聞かねえよ？

「つて、婚約者あああー？」

「反応遅いです　後一秒遅ければコレの口から火を吹いてました

」

ダラダラと額から嫌な汗が流れる。あ、アブねえ.....！

「お前が言つてた婚約者つてこの人だったのか！？」

「あら、ルシファー様が私の話をしてくれてたんですか！　嬉しい

」

「.....チツ」

ルシファーの舌打ちと共に俺の右側でカチツと何かを下ろした音が
聞こえる。や、やめて！　それ以上この人の機嫌を悪くするのやめ
て！！

「で、で？　なんでその婚約者が俺の命を狙つてんの？」

正直、ルシファーの婚約者うんぬんはいい。それよりも優先するは
俺の命。とりあえず狙われている理由から探ろう。

「いえ、魔界の情報屋からこんな噂を聞きました……」

「う、噂……？」

メイドは左手を頬に当て、ため息をつき、

「ルシファー様が魔界を見捨てた、と……」

「え？ ルシファーが魔界を捨てた？

「いや、それは俺たちの世界に来た時、ゲートが壊れて
「ならどうして、私はここに来れたのでしょうか？」

「う……！ そう言えばそうだ。ドラキュラやカラス人間もこちらの
世界に普通に来たじゃないか。
じゃあ、門の故障つてのは嘘？

「おい！ ルシファー、お前

「それはどうでもいいんです」

「へ？ それはどうでもいいの？

「それより、この人間がルシファー様の魔王証明書を見た、という
情報が入りまして……」

魔王証明書？ ああ、あの名前以外読めなかつた紙か。

「その情報の漏洩防止のためにきました 私と結婚するか、この
人間が死ぬか選んでください」

笑顔でアレの引き金に指を掛けるメイド。

つて、ちょっと待て！

「アレは勝手にコイツが」

「見せろと言われたから見せた……！ 見せなければ殺すと脅されていたんだ……！ だから一思いにソイツの命を……！」

「ルシファー！ テメエエエエエ！」

あの野郎！ 僕を売りやがつたぞ！？ そんなに結婚するのが嫌か！ 僕もこのメイドは嫌だけどな！

「分かりました……。では、この人の命とルシファー様のキスで交渉成立です」

「ちょっと待つて？ 今一つ要求を付け足したよな？ キスなんて聞いてねえぞ！？」

「キス云々の前に俺を助けるよおおおお！」

これが人生最大の叫びなんだと自分で思つた。

数分後。僕の身柄は解放され、学校へダッシュしていった。隣には例のメイドもついてきている。

「な、なあ？ とりあえずその黒光りするモノをしまつてくれない？」

「？」

「なぜですか？ あなたの命が狙えないじゃないですか？」

「狙うな！ ……つてのもあるけど、町中でそんなもん出してたら捕まるからな」

俺も一緒に。

「そつなつた場合、その人達を消してしまつてもいいんですけど、ルシファー様の好きな人間界を壊れてしまつのもなんですしね……。今は従つておきます」

そう言つと、メイドはアレをメイド服の中にしまつた。

……しかし、口を開けば危ないことばかりで、ルシファーの気持ちも分からぬことはない。大変そうだな。このメイドとの結婚生活は。

「で、お前何でメイド姿なの？ 普通の格好とかはしないのか？」
「まあ、元タルシファー家のメイドでしたし、私がこの姿好きですから」

「ふうん。で、アイツって魔界ではどんな風なんだ？」

「優しい人ですよ……。私が路頭で彷徨ついたら、突然現れて『俺の家で働け』と言つて、寝床、食事をすべて用意してくれましたから……」

優しいところ有るんだなアイツ。

それはメイドの表情を見ただけでも分かるくらいだ。

「でも、なんで魔物が人間界に次々来るんだよ？ ルシファーがそんなんことするはずねえし……」

それを聞いた瞬間、メイドの表情が暗くなる。

「それはルシファー家に相反するベルゼブブ家を始めとした四大王家などの仕業だと思います」

「そう言えれば、結城さんが『ルシファー家は屈指の……』って言つてたもんな。最強と言わなかつたつてことは力でまだ上の奴がいるつてことか。

「魔物が人間界へ侵略するのを防ぐために、ルシファー様はこちらの世界へ来たのかもしません」

「そうか。アイツはそれで『門の故障』だなんて嘘を……」

「ルシファー様は一人で抱え込みすぎです。婚約者の私にもつと言つてくださいに」

「つたく、ホントアイツはなんでも一人で抱え込んでるんだな……。でも、アイツの気持ちも分からなくはない。きっとお前を巻き込みたくなかつたんだと思う」

「私……を？」

ルシファーが魔界を抜け出し、人間界の魔物を倒した事が知れれば、きっととアイツは仲間殺しの烙印を押されるだろう。そこにこのメイドを巻き込めば、他のやつらは魔王への攻撃だけでは飽きたらず、婚約者であるメイドにまで手を伸ばす。だから、アイツはこの人を婚約者にしたくないのか……。メイドという扱いならうまく行けば逃せるからな。

「……そうだな。お前はルシファーを信じて待つてろ。ルシファーは絶対にそんな奴等になんか負けねえからな!」

「……ふふ、貴方は面白い方ですね。ルシファー様が貴方の家に住んでるのも分かりますよ」

「どうしかと言つと、俺は家主としてしか見られてないような……。

「そう言えれば貴方の名前を聞いてませんでした」

「俺は黒條白鬼。普通の高校生だ」

「私はヘレン＝エリアルです。これからもルシファー様をよろしくお願いします」

ヘレン＝エリアルか……。これからエリアルと呼ばせてもらおうかな。

「じゃあ、俺は俺なりにルシファーに協力してみるよ
「分かりました。私も魔界で調べてみます」

そう言いつと、エリアルは人間離れした跳躍力で近くの家の屋根を次々と飛んでいった。

「よし……学校で結城さんに相談してみるか

結城さんなら協力してくれるはず。俺にできる」とはやつてみせるー

「そうか。それで魔王は人間界に……」

放課後。一通り事情を話すと、結城さんは快く協力を承諾してくれた。

やつぱり優しいよな、結城さんは……ー

「で、アイツは一人で解決しようとしているみたいだから、裏からサポートってできないかな?」

「まあできぬもないが、私は今もう一つの事件もあって、あまり

大きく動けないんだ」

もう一つの事件？ はて？ そんなのあつただろうか？

「黒條君は覚えているか？ 君が最初に出会った魔物の事を……」

「確か、狼の魔物だつたよな？」

「これはその狼の魔物の体内で発見した」

そう言つと、結城さんはスカートのポケットから小さなクリスタルのよつなものを取り出した。

「何だコレ？」

「これは『ドーピングクリスタル』と言つて、魔物の理性と力を暴走させるものなんだ」

「なつ……ー？」

じゃああの時、異常なまでの破壊衝動はコレのせいだつたのか！？

「最近こいつが魔物の間で流行つてゐるらしい。でもその大半は理性を失うことを知らずに飲むんだそうだ」

「騙されて飲まされてる、つてことか……」

いつたい誰がそんなことをしてやがんだ……！ 魔物にだつて心はあるというのに……！

「たぶん、その『魔物の人間界侵略』と、この『ドーピングクリスタル』の一件は繋がつてゐるかもしね。私はクリスタルの件をメインに協力していく事にする」

「分かった。じゃあ俺は人間界侵略の方を調べてみるよ」

さて、話も終了したことだし、早速家に帰つて方法を練らなきゃな。そう思つて立ち上がるうとした瞬間、結城さんにその手を掴まれた。

「ゆ、結城さん……？」

柔らかく暖かい結城さんの手は小さく震えていた。

「本当は君を私たちの問題に巻き込みたくないんだ……」

「結城さん……」

「危険な目に遭うかも知れないんだぞ……？ もしかしたら命を失うことになるかも知れないんだぞ……？」

一般人である俺にここで止まつてほいようなセリフ。確かに分かる。俺がもし結城さんの立場なら、絶対に一般人を関わらせないでおこうとするかも知れない。でも違う。違うんだ。

「それは違うんだよ結城さん」

「え……？」

「確かに俺は一般人だ。ゲームで言えば村人Aみたいな存在で、何の力もなければ、勇者のパーティにも魔王の配下にも就かないようなモブキャラだよ」

一呼吸置いて、言葉を続ける。

「でも、そんな俺でも只々、村で勇者が来るのを待ち続けるだけの、勇者にすがつているだけの村人には絶対なりたくないんだ」

自分で言つていて少し恥ずかしいが、それは俺の本音。主人公じゃなくてもいい。特別なポジションなんていらない。村人で十分。でも待ち続ける村人だけは絶対にならない。それが俺の信

念。

「そ、うか……。分、かっ、た」

納得したような表情をする結城さん。い、今の発言引かれなかつたかな？ すごい不安なんだけど……。そんな不安を吹き飛ばすように結城さんはいつ言つた。

「一緒に解決しよう。黒篠君！」

「……お、おうーー！」

絶対に魔界の住人を、ルシファーを助けて見せる……！

第一章(6) とある少女から語られる魔界の歴史

……で、何から調べていいいのか分からない。

結城さんに『魔物の人間界侵略』に関して調べるぜ！ と言つたのはいいものの、魔界の状況は俺には分からぬし、情報を調べに帰つたアエリアルもいつ戻つてくるか分からぬ。

初っぱながら、手段ゼロと言つていいほど、手詰まりを起こしていった。

「はあ……。せめて魔界の様子とかを見れたらな……」

『ほな、見せたろか？』

突然聞こえてきた声に体を強張らせる。い、一体どこから聞こえてきたんだ！？

『ああ、『じめん』じめん！ どこからゆつてるか分からんよな？ 今姿見せるから待つててな？』

突然、収納タンスの引き出しが開き、その中から一人の少女が現れた。それも驚きなんだけど、何で魔界から関西弁の少女が現れるわけ？ ……もしかして、魔界にも方言とかあるのか？

そんな事を思つていてる間に、少女は俺のベッドの上に座つていた。見た目は俺とそんなに変わりないよう見える年齢の少女は、中に黒のタンクトップ、その上に淡い黄色の上着を着て、下には膝まで のデニムパンツを履いていた。……えらく人間界っぽいファッショ ンだな。

そして夕日を彩るかのように赤い髪を一ヶ所で束ね、ポニーテール 状にしている少女の顔は可愛いと呼ばれるようなタイプをしていた。

「いや～、『めんな～！』うちに来んのは始めてやから、ど〜か
ら出たらウハんか、分からんかったわ～！」

「いや、別にタンスの引き出しかり出でてくる必要は無いんじや……。

未来の猫型ロボットじやあるまいし……」

「ほんで自分、魔界の様子を知りたいんやつたな！」

や、聞いてねえ……！

「あ、やつややつや。自己紹介が遅れたわ！ ウチの名前はキャロ
ル＝アミー。よろしくなー！」

「あ、ああ……よろしく……」

おかしい……！ 全然自分のペースにすることも、相手のペースに
乗ることもできないぞ……！？
しそうがない。個性的な自己紹介でペースを取り戻す！

「聞いて驚け！ 僕はこの世に蔓延る悪を成敗する正義の味方
「ああ、黒條白兎やう？」

惨敗したよ母さん……。せつかく中一っぽい設定まで考えたのに…
…。

「まあ、ルシファー家が治める魔界では有名やからな～、アソタ

「へ？」

「だつて、魔王と暮らす人間は、嫌でも有名になるやう～！」

「マジで？ 魔界ではそんなんことになつてんの？」

「普通、人間と魔界の住人が一緒に暮らすことはあらへん。……」

〇〇年前なら即死刑や」

そ、そんなに厳しいのかよ、魔界つて……。

「でも、レイエス＝ルシファーの親父さん、ロバート＝ルシファーが魔王になつてから変わつた。人間界と友好関係を築く事になつたんや」

「へえ～。そうなのか」

ルシファー家つてのは、人間界になにか特別な感情でも持つていたのかな……。

「でも、それに反対する王家はようけおつた。それまで魔王だったサタン家を始め、ベルゼブブ家、ガープ家とかやな」

アミーは一呼吸おいて話を続ける。

「でも、ルシファー家の血筋は特別魔力が強く、勝てるもんはそうおらん」

「そんなに強いのか……」

「でもじやあ、その反対している王家はおとなしく従うしかないんじや……？」

「だから勝たれへんて分かつてる反乱軍が起こした行動は、『人間界に魔物を送り込む』という卑怯極まりない作戦やつた」

「なつ……！」

強大な力を持つルシファー家を狙わず、力が弱い人間の方を消そうとしたのか！？

「当然、ルシファー家は人間に荷担し、その王家達相手に善戦したんやけど……」

「したけど?」

それまで普通だったアミーの顔が、突然暗くなる。

「ロバート＝ルシファーはその戦争で戦死した」

「……！」

「な、なんで!? ルシファーの父さんの力は強大だったんじゃ……！」

「ある王家がとある一族の人間を催眠をかけ、ロバート＝ルシファーを暗殺したんや」

突然重みを増す空氣。息を吸うのも苦しくなる。

「ロバート＝ルシファー死亡により、魔王の座は再びサタン家に戻るかと思われたんやけど……」

もつたいぶるように話を区切るアミー。

「次に魔界の住人が選んだのは、ロバート＝ルシファーの息子、レイエス＝ルシファーで、サタン家に入れた奴は反乱を起こした奴等だけやつた」

「人間と友好関係を結ぼうとするルシファー家の方がみんなに受けいられた、つて訳か」

「そうや。それでサタン家率いる反乱軍はルシファー家への反対をやめた」

「うした歴史を経て、アイツは魔王になつたのか。

「でも親父を人間に殺されたルシファーは、相当人間を恨んでるはずじゃ？」

「それはない。息子に父が最後に残した言葉が『決して人間を恨むな。この裏切りも魔界の欲望が産み出したのだから』やつたらしくからな」

「じゃあ、ルシファーの父さんは裏切りに気づいていたのか？」

「ああそりや。でもそれでも人間に少しも敵意は向けへんかった」

「すげえ……！　どこまで男らしいんだルシファーの親父……！」

「で、裏切った人間ってどうなったんだよ？　他の人はその人が操られていた、なんて知らないんだろ？　ずっと憎しみの対象になつたんじゃないかな？」

「しばらくは非難、差別の嵐やつたみたいや。でも長い時間が経ち、みんなの記憶からは忘れ去られていつた」

「今でも裏切った人間の血筋つて生きてるのか？」

その質問にアニーの顔が真剣味を増す。それを見て俺も唾を飲んで聞く事にした。

「裏切った人間の一族。それは勇者の血を引いた一族の事や」

その瞬間、俺の息は止まるかと思った。……ゆ、結城さんの一族が裏切った……！？

い、いや操られてたから、裏切ったのとはまた違うけど、それでも

「まあ大分昔の話やし、その勇者様がどこにあるかは知らんけど、

今でも罪の意識は引き継がれてるはずや

「ゆ、結城さん……」

それで俺が『勇者はカツコいい』って言つたとき、一瞬暗い顔をしたのか……。

「でも、何でアンタそんなに戦争詳しいんだ？ 見た訳じゃないんだろう？」

「そや？ 見た訳じゃないけど、ウチの親がルシファー家と親しかったから、色々と情報は手に入るしな！ それにレイエスとも何回か遊んだことあるで？」

そ、そういうものなのか……？ なんか、いいとこのお嬢様みたいな会話だつたな……。

「で、話を本題に戻すでー！」

いきなり声を大きくするアリ一。
と、突然何だよ……？

「アンタ、魔界の様子を見たかったんやな？」

「あ、ああ……。そりや じゃねえ、そうだ」

思わず関西弁が移つちまつたじやねえか。

「ほんじやあ、ウチが一週間で人間用転送ゲートを作つたるー！」

へ？ そんなの作れんの？ つてか、魔界に俺が行くの？
ベッドから飛び降りたアミーはタンスの中から色々な道具を取り出す。な、なんだ？ ほとんどがホームセンターに売つてるような物

ばかりだぞ！？

「つてか、なんでお前は俺に協力してくれんだよーー？」

別にこの俺に直接的な繋がりがある訳じゃないし、ルシファー家繫
がりだけで、ここまでしてくれるのはおかしい。

なにか、裏があると思ったのだが

「まあ、ルシファーの友達ってのもあるけど、アンタはアエリアル
の友達らしいからな！ 友達である一人の友達は、ウチの友達でも
ある！ だからここまで来たんやから！ ……あれ？『友達』言
い過ぎてワケわからんなった」

予想外の一言に俺は息が止まる。

「…………え？ アエリアルが俺の事を友達って言つてたのか
？」

「ああ！ 『男の友達は初めてです』って言つてたで！」

あのメイド、そんな事を言つてくれたのか…………！ な、何だか目か
ら塩水が出てきやがつたぜ…………！
アニーはドリルやら木材やらを持つと、

「じゃあ、今から工事開始やー！」

で、一体何処を工事するんやろ？ ……ハツ！ また移った！

工事開始から三日後。

アニーの気分転換も兼ねて、俺と後輩の櫻葉と雨音の二人、そして結城さんとルシファーの合計六人で遊園地に遊びに来た。

……分かるよ？　お前らそんなことじつる暇があるのか、つて俺ですら分かるもん。

でも、息抜きは必要だと判断した俺は無理を承知して、みんなを誘つた。するとみんな、快くオッケーしてくれたのだった。

「よう、久しぶりだなアニー」

「そうやな。何年ぶりや？」

「ハ〇年ぶりくらいじゃないか？」

「せやな。あん時はお互に生意氣な子供やつたからな～」

お前ら一体何歳なんだ？　聞くのは何だか危険な香りがするので、とつあえずやめておこう。

「せや！　レイエス！　あん時のウチとの決着ついてへんで！」

「そういや、そうだつたな！　よしここで決着を着けるか！」

え？　まさか戦闘するの？

「や、やめるよ？　ここには一般人が」

「じつちが先にジョン・ヒースターで酔うか勝負だ！」

「受けてたつで！…」

……俺の心配返せ。

そんな俺の心の声も知らず、ルシファーヒーはジョン・ヒースターのある方向へ走つていってしまった。

「黒條君、今の会話はこの一人に聞かれても良かつたのか？」

「はっ！？ 今結城さんに言われて気づいた！」

恐る恐る見ると、櫻葉と雨音はニコニコと笑っていた。

「あ……あれ？ 一人は今の会話、おかしいと思わなかつたのか？」

普通の人が聞けば、絶対おかしく聞こえる会話だつたのに、一人は普通に笑つていた。

「ええ、先輩。別におかしいと思ひませんでしたよ？」

「そうですよ？ だつて私達」

一人は一呼吸置くと、声を合わせてこいつ言つた。

「魔術師ですから……！」

「なつ……！」

「ええええええええ！」

突然のその言葉に、俺と結城さんは衝撃を隠せなかつた。

第一章(7) 少しの間の休憩

俺たちは一瞬耳を疑つた。

ええっ！？ この一人が魔術師！？

……ん？ よく考えてみると、魔術師だから何なんだ？

「結城さん。魔術師つて一体……？」

「魔術師とは様々な魔術が使える者の事だ。昔は勇者的一族と行動を共にしていたのだが……」

心底言いにくそうに顔を曇らせる結城さん。

昔ということはあの戦争の事が関連しているのか……？

そこは紳士の黒條白鬼。結城さんにしか聞こえないように耳元で話しかけた。

「（まさか、あの戦争か……？）

「……」

突然顔を真っ赤にした結城さんは、驚いたかのように一歩後ろへ退く。……やつぱりタブーな事に触れたから、俺を警戒してるのでな。

……。

「1」「めん結城さん。お、俺

「み、みみみみみ耳はダメだつ！ なんかくすぐつたい感じがする

つ！」

……なんか、俺まで顔が熱くなってきた……！
耳まで顔を真っ赤にしてモジモジする結城さん。か、可愛いっ……！

「……ハイハイ、そこでベタベタしないでくださいーー」

氷のよつこ冷めた田線で「ひらひらを睨む雨音。

「べ、別にベタベタしてなんか……」

「う、うん。そうー、ベタベタなんか……ベタベタなんか……」

どんどん結城さんの声のボリュームが小さくなつていく。

「……そんな」としたら、黒條君に迷惑が掛かつてしまつ……

「え？」

何が何だか聞こえなかつたが、少し元気がないようだ。……こんな時に戦争の話をしたら、余計に結城さんを傷つけてしまつだらう。こはおとなしくしておく方がいいな。

「でも、一人が魔術師なんてな……。つて事は結城さんやルシファーなんかの事情は全部分かつてるのか？」

俺の質問に雨音と櫻葉は軽く頷き、「はい、一通りは」と答えた。

「やつか……それなりい。よし、今日は遊びまくるか！」

「……えつ？ 黒條先輩？」

ちょっと楽しみにしていたジェットコースターへ行こうとした俺は、櫻葉に呼び止められる。

「何で俺らが黙つていたのか、とか聞かないんですか？」

「え？ 何で？」

すぐに返した言葉に呆氣を取られたのか、キヨトンとした顔をする二人。そんな変なこと言つたかな……？
すると、雨音が慌てたような顔で声を出した。

「ふ、普通気になりませんかっ！？ 後輩が魔術師なんですよ！？」

「いや、じついつた事態にもう慣れたし……」

「な、慣れた！？」

いきなり魔物に襲われたり、家に魔王が居候したり、クラスメイトが勇者の血を引く人だつたり、突然メイドに殺されかけたり、タンスの引き出しから関西弁を喋る少女が現れたりして、もう大抵の状況に慣れてしまった。

後輩一人が魔術師と聞いた時、最初こそ驚いたが、すぐに納得してしまつたし……。

「うん、やつぱりそこまで衝撃はなかつたな」

「そう……ですか。先輩は私達に興味がないんですか……？」

「確かに『魔術師』には興味はねえ。関わつてるつて言つても、あんまりそつちの世界の事も分からねえしな。でもお前達『個人』は別。後輩でもあり、友達でもある一人には興味がありまくじで、引いちゃうくらいだぞ」

「…………」「…………」

最後にワインクをしながら言つたのが気に入らなかつたのか、櫻葉は苦笑い、雨音は軽蔑の表情を浮かべていた。

「さ、行こうよ櫻葉くん」

「そ、そうだな。うん、行こう」

何かを警戒するように俺を避けながら、一人はメリーゴーランドの方向へ走つていってしまった。

「ちょっと！ そういう意味の興味があるじゃないって……」

手を伸ばしながら叫んでみるが、時すでに遅し。周りに立っていた人達から、『見てあの人。男女一人に変態的な告白をしてたわよ。きっとバイよ、バイ』なんていうとんでもない声が聞こえてきたのだった。

「あの二人、嬉しそうだったな……」

突然、結城さんがそう呟いた。

嬉しそう？ 俺からじゃ表情は見えなかつたけど、すごい気持ち悪いものを見るような態度だつたような気が……。

「さ、私達も行こうか。黒條君！」

「あ、ああ……」

結城さんに手を引かれ、俺はジェットコースターの方へと向かうのだった。

「次はアレに乗ろう！」

俺の手を引っ張り、次に指差したのは、円形のステージに馬や馬車

が設置してある、メリーゴーランド。子供やカッフルが一回一回こながら乗つており、とても楽しそうなのが……。

「な、なんかカッフル比率の方が高くて、の、乗りにくい……」

乗っている殆どが男女のカッフル（なにかどうかは知らないが）で、俺としては気まずいことこの上ない。結城さんは平気なのだろうか……？

俺がそんな事を思つてゐるなんてつゆ知れず、結城さんはメリーゴーランドの順番待ちの列に並ぶ。

するとそんな時、前方のカッフルからこんな声が聞こえてきた。

『「こか？ 二人一緒に乗ると離れなくなる、という噂があるメリーゴーランドは』

『「そうよ？ ここのメリーゴーランドには」一頭の馬がペアのよう並んだ場所が一つだけあって、そこに一緒に乗れば、二人は永遠に結ばれるらしいの！』

『「ふうん。噂が本当か嘘かは分からぬが、乗らないわけにはいかないな』

『「愛してる……』

と、一見普通の会話だが、この会話をしている一人は男である。……

……そ、それぞれの愛の形とやらがあるのだろう……！

そんな二人の会話は耳に入つていい結城さんは、目を輝かせながら順番を待つていた。

（その噂が本当なら、結城さんは俺なんかと乗つていいのだろうか……。お、俺的にはすごい嬉しいんだけど……）

もつと大切な人ができた時に来た方がいいんじゃないのか、とは思

つたが、もう既に列の中腹。途中離脱はできない。そして待つこと数十分。俺たちの番が回ってきた。

「アーティスト」

係員のお姉さんに案内され、二人はそれぞれの馬に乗る。するとそれは一頭が横に並んでいるペアの馬だった。

「どうしたんだ黒條君つ！？」

ハツと係員のお姉さんを見ると、親指を立てて、『頑張れ！』的な表情をしている。お姉さんが仕組んだ事だつたのか……！少し取り乱した俺を慰めるかのように、結城さんは俺の左手を握つてくれた。

さつきから思っていたが、結城さんの手はすこく暖かくて心地がいい。なぜだか分からぬが、心の底から安心感が込み上げてくる。

「落ち着いたか……？」

心配そうに見る結城さんに俺は「あ、ああっー」と裏返った声でしか返事ができなかつた。

そしてスリーリーテントが動きだし、
辺りの景色を見ていた。

「黒條君
「ん、何?
結城さん」

返事をしてから結城さんの方を見ると、少し微笑んでいたのが分かった。

「今日はありがとう。私達に気を遣つて誘つてくれたのだね。……？」

「ま、まあ、たまには気分転換でもしないと、と思つてな……」

「ふふ、黒條君は優しいな……」

「そ、そんな事、なな無いって……」

女性にあまり『優しい』と言われた事がない俺はその言葉にかなり動搖してしまつ。

や、ヤバイ……！ か、顔が熱くなつてきた……！

「ふふ、顔が真っ赤だぞ」

「い、いやこれは暑いだけであつて、別に照れてる訳じや……」

「私は別に『照れてる』なんて言つてないぞ？」

からかうように言われ、俺はさらに顔が熱くなり、何も言えなくなつてしまつた。

しばらくするとメリー・ゴーランドも終了の時間が訪れ、ゆっくりと回転を停止していく。

「楽しかつたな黒條君……」

「ああ、楽しかつた！」

メリー・ゴーランドを出で、近くのベンチで座つていると、どこかから物凄いスピードで走つてくる影が一つ。

誰だ？ と思つて見ていると、その影は俺に向かつて突撃してきた。

「うょ、ちゅうとスピードを ぐばあああああー！」

激突してきた影によつて俺は吹つ飛び、近くの地面に背中を強打す

る。

「ゲホッゲホッ！－ こいつ……。一体誰だよ！？」

「なんや、この程度の突進も止められへんのか？」

「こ、この関西弁は……、と思つて見てみると、そこには案の定、ツインテールの魔界人アミーだった。

「な、何でいきなり突進……？」

「いや、なんとなくや」「や

「何となくで人を吹つ飛ばしてんじゃねえええ！」

「まあ、そういうなや。ウチもテンションが上がつてんねんから！やつぱり遊園地は楽しいな！」

「そ、そعدつたのか……。楽しんでもらえて何よりだ」

楽しそうに元気にしてくるアミーを見ていると、誘つて良かつたな、と思つ。

「ところで、ルシファーはどうこつたんだ？」

アミーと一緒に消えてこつたはずのルシファーがいない。

「ああ、アイツならな」「

「連れてきましたよ！」

「ぐはつー。」

突如聞こえた女性の言葉と共にルシファーが「み袋のよつて投げら

れる。

その女性の声の正体は兩音だった。

「雨音が… ルシファーはどうにいたんだ?」

「ジヒツト「一スターの鉄骨にいました」

「鉄骨? 鉄骨つてまさか!?」

「はい。ジヒツト「一スターの鉄骨の上で、やつてくの「一スターを飛んで避けるというゲームをしてたんですよ」

「どれだけ危険なことをするんだアイツは…… つてかあの野郎…… 周りの人に不自然な行動を見せるなよ……!」

注意しようとしたルシファーの方へ振り向くと、アイツは体育座りのままでじけていた。

「最近俺、魔王として扱われてなくね? わりとやさしいみ袋のようчик一やれるつてどうこうことだよ……。つーか、出番すら少ないし」

出番なんたらせぬとき、確かに魔王としての風格は失われつつあるルシファー。そこは「リケートな部分なので、あんまり触れないでおこうか……」

「先輩。最後にみんなで観覧車に乗りませんか?」

雨音と共に帰つてきていた櫻葉がそんな提案をした。
みんなで観覧車か……。今日はあんまりみんなで遊んでないもんな。

「よし乗るか!」

「こいつ」と、最後に観覧車に乗ることになつた俺たちは、すぐこ観覧車のあるヒリアに着き、早速乗車することにしたのだが……。

「なんでテメホと二人なんだよ」

「それはこいつのセリフだ!」

なぜか俺とルシファーの一人という組み合せになってしまった。自分の前方の籠を見てみると、四人が楽しそうに話しているのが分かる。

一つの籠に六人は多すぎるっていうのは分かるけど、なんで「コイツと一人なんだ……！」あっちのほうが楽しそうじゃないか……！

「おい」

「な、何だよ？」

突然話しかけられ、焦った声を出してしまった俺。

「！」の遊園地のことだけよ……。一応感謝はしてるからな……」

照れくさむうに言つるシファー。

いつも思つけど、こういう時は素直なんだよな。……いや、やってる行動も素直つていえば素直か。

「お前、俺がなんで人間界に来たか分かってるんだろ？　だから気遣つて俺をここに連れてきたんだろ？」

「…………ああ」

「コイツは気づいていた。俺がルシファーの目的を知っていることに。そして俺を説得するようにこう言つた。

「でも、これは俺の問題だ。一般人のお前が出しゃばる場面じゃない」

言い方こそ違うが、結城さんと同じで『一般人を巻き込みたくない』と言つてゐるのだろう。

それは分かつてゐる。分かつてゐるけど、俺は
と、言葉を発しようとした瞬間。全身に異様な寒気が走つた。

「つ
！？」

観覧車から辺りを見回す。が夕焼けに染まる空と海や、遊園地の中
の人、アトラクションが見えるだけで、怪しいものなんかない。き、
氣のせいだったのか……？

と思った時、沈みゆく夕日をよく見ると、小さく一つの影があつた。
眩しくて見えづらいが、あれは人っぽい形をしている。

「どうしたんだよお前？」

「お、お前にはアレが見えないのか？」

俺は人影がある方を指差すが、『何もねえけど?』と言つて違う方
向を向くるシファー。

もしかして俺にしか見えていないのか？ とそんなことを思つてい
るついにその影は姿を消してしまつた。

（な、何だつたんだアレは……？）

アレが何だつたのか分からぬが、そういう考へてゐる間に籠がス
タート地点に着いてしまい、俺たちは観覧車を降りたのだった。

あれから四日後。

「できたで～」

「できた？ できたって何がぶおうふ ！！」

「お前の脳みそは赤みそでできとんのか？ 転送ゲートができるゆうてんねん！ 早よせえ！」

「い、いちいち殴る必要があるか！？」

殴られた頭をわすつながら、自分の部屋へ向かう俺とアリィー。するとそこには引き戸版ど でもドアらしき扉が立っていた。

「お前、もしかしてド えもん好きか？」

「何の話や？ ウチが好きなんはキテ ツ大百科や」「うん、ごめん。俺が聞いといてなんだけど、この話やめようか。……で、このドアを入れば魔界に行けるのか？」

「ああそや。でもどこに転送されるかわからんから、そこつけやー。」

「ええつ！？ いきなり危険な場所に転送されたりしねえよな！？」

「…………。早よ行くで」

「今の無言は何ヅー？ ちよつ、待つて！ 嫌な予感がするこやああああああああ ！！」

抵抗する暇もなく、俺はアリィーに服の裾を引っ張られ、引き戸版ど いで ドアの中へと入つていつたのだった。

第一章（1）魔界に到着！でもここ何処だ？（前書き）

第一章突入！

いつも読んでいただいている方、そして今回初めて読んでいただいている方、本当にありがとうございます。

所々読みにくいくらいや意味が分からなこといろいろが正直あると思います。

なのでお手数だとは思いますが、『こゝはこつした方がいいんじゃないか』というお気つきの点、他にも『意見・感想等がありましたら、どんどん報告してください！

これからも『俺と勇者と魔王の伝説作り』をよろしくお願いします！

第一章（一）魔界に到着！でもここ何処だ？

『……………』

何か声が聞こえる。……女性の声だ。

『タ……………テ』

タテ？ もうちよつと、もうちよつとハツキリ言つてくれれば……！

『タ……………ケ……………テ』

「ぐほおうつー」

何かを望むような女性の声は、俺の例えることが不可能な声でかけられた。

は、腹が…………！ 中身全部出る…………！

「こつまで寝てんねんボケ！」

きつい関西弁に田を覚ますと、そこには俺の腹を踏みつけるアマーニーがいた。

べ、別に俺の腹を踏んで起こす必要はないんじや…………。

「で、魔界に着いたのか…………？」

辺りを見回すと、鬱蒼と生い茂った草木や夜みたいに暗く重々しい空。

どいを見ても夜の森っぽく見えるのだが…………。

「一応な。でも、ここは進入禁止区域の森や。多分野生の野獣族がつようよ出てくるやうな」

「そうか。進入禁止区域の

「そうか。進入禁止区域の森か」…………え？ 今なんて？」

自分でやらなければ、ここには、進入禁止区域で

「どう」とは、俺たちは今とても危険な状態ってことか？

「ああゆうとくねえ、ウチは戦闘とか出来ひんからな」

な、何で？」

だから言つたじやん！ いきなり危険な場所に出るんじやないかって！ 今完全に予想通りになつてるぞ！？

「まあまあ、そんなに慌てたらアカン」。一田落ち着き一

「何か策でもあるのかよ……」

「ないな」

一回本氣で頭を殴ついてやるのかマイシ.....

「でもな、こここの野獣は力がごつつい高い代わりに遭遇率が低いね

L

ガサツ、と音を立てて近くの草むらから、俺が初めて出会った狼に似ている魔物が出現。

「……遭遇率がなんだつて？」

「いや、ウチは何も言つてない」

「オイツ！ つてこんな所で漫才をしている暇はない！ アミー！」

何か策はないか！？」

「こっちから行かんければ、襲いかかつてくる」とは

大きな腕を振りかぶり、俺の喉元を切り裂くとする一足歩行の狼。
……殺る気満々じゃねえか。

「仕方ねえ！ アミー！ 何か粉末状のもの持つてねえか！？」

「い、一応コンクリの粉があるけど？」

「何であるのか知らないが、それでいい！ ちょっと貸してくれ！」

アミーは鞄をゴソゴソ漁り、中からコンクリの粉が詰められた袋を取り出すと、それを俺に投擲する。それを受けとると、俺はアミーに向かつてこう言い放つ。

「よし、サンキュー！ アミーは先に逃げろー。」

「自分はどうするんや！？」

「俺は後で追うー。だから早く逃げてくれ！」

渋々「分かった」と頷くと、アミーは木々の間へと走つていった。

「さて、俺は遊んでこきますかね

正直、その遊びで命を失いそ่งだが。

「でも、そつ簡単に俺の命を貰えると

そう言つた瞬間に、狼の鋭く尖つた爪が俺の目の前を通りすぎた。
……距離があつたから良かつたけど、死ぬ、ホントに死んじゃうー。

続けて相手は一步踏み出し、上から左腕で攻撃を仕掛けてくる。それが分かつた俺は、右からの攻撃にも備え、狼の左側を転がるようにして避けた。そしてアミーから受け取ったコンクリ入りの袋を破り、相手が振り返った瞬間、その粉を思いっきり浴びせかける。

(よし、今だ!)

粉を浴びて油断した狼に全身全霊のタックルをお見舞い。俺も一緒に転んだが、狼も少しばダメージを受けたらしく、小さく呻き声のようなものあげていた。

(……今うちに逃げよ!…)

俺は狼から全力で逃げたのだった。

そして、それから走ること数分。

何や、湖のような場所に俺は出でていた。

神聖な雰囲気を醸し出し、そこだけ昼間のような明るさをした湖は、見る者の心を惹き付けるような感じが出でている。

「ちょうど喉乾いてたし、ちょっとだけ飲ましてもうつかな

両手で水を掬い、それを口に付けて飲む。

「……な、なんだこここの水！ スッゲー美味しい！」

その美味さに驚きながら、一、二、三回その水を飲むと、俺は一応持つてきていたペットボトルにも給水しておき、アミーを探すために立ち上がりつた。

(ア、また魔物に出会つたりしてねえよな?)

心配になつた俺は、もう一度森の方向へ戻ることにしたのだが、そんな折、俺はあることに気づいた。

「体が軽いぞ！」

水分補給をして、かなり体力を回復したらしく、体がすく軽くなつていた。……これなら魔物から小細工無しで逃げれるかも知れないな！

「アミー！ 聞こえるか～！」

叫んでもみても返事がない。遠くの方へ逃げたのか……？魔物に遭遇していないことを祈りつつ、俺はアミーの捜索を継続する。……警察かよ。

そして一時間ほどが経つた。が、アミーが見つかる気配はない。

「うーむ。アミーは何処へ行つたのだろうか……」

探しても探しても、見つかる気配がない。……まさか、魔物に出会つたとか？

一抹の不安を抱えながら森を歩いていると、一つだけポツーン、と建つた小屋を見つけた。

ホントに人間界の森みたいだな、と思ひながら小屋のドアを開けると、そこは本当に普通の小屋だった。

壁に暖炉があり、その近くには童話で出てくるような椅子が。壁一面の本棚には様々な本がビッシリと詰め込まれており、ここに住んでいる人は読書好きとすぐに分かる。

「すいませーん

呼び掛けてみるが返事は無し。

その後も一、二回呼び掛けるもいずれも返事はなかつた。
留守なのか？と思つて小屋のドアを閉めようとした瞬間。突如として人の声が聞こえてきた。

『今は五時ですよ～？』

時間なんて誰も聞いていないのに、時刻を伝えてくる声。
声の高さから恐らく女性だと思つんだけど……。

『「こ」に赤髪のツインテールの子は来ませんでしたか～？』

『赤髪のシャ クスなら私もファンですよ～』

『話が噛み合つてねえ！？』

合つてたの『赤髪』くら～だぞ！？ しかもなんでワ ピース知つてんだ！

ふと本棚を見ると、そこにはワンース全巻が揃つていた。つか魔界でも売つてんの！？

よし、ちゃんと聞こえるよひづれおひづれ。たぶんアツチはちゃんと聞こえてないだけだ。

『「こ」に女の子が来ませんでしたか！』

『はい、私は女の子ですよ』

『微妙に違うッ！』

でも今度は『女の子』は合つてた。つてことはこの人、一言だけを聞き取つてる！？

『……女子訪問！』

なぜか四字熟語みたいになつたが、これなら聞き取ってくれるはず

……！

『四字熟語は得意です！』

「何で心の声を読むんだ！ ってか得意ってなんだ！」

もういい！ アニーは居そうにないし、さっさと行こう！……と思ひドアを閉めた矢先、振り返つた俺の目の前に一人の女性が立つていた。

「おおつー！？」

暗い森の中でキラキラと光る長い銀髪。まるでカラー・コンタクトをしているかのような綺麗な青い瞳はとても印象的。セーターとロングスカートを着ていても分かる体つきは兩音にも見習わしてやりたいくらい。

そんなおつとりとした雰囲気をした女性は俺の顔を見て、二二二二と笑つた。

「で、どうされたんですか？」

「あ、ああー ちょっと知り合いで探してまして……」

「先程言つておられた赤髪の女の子ですか？ それなら私の小屋にいますよ

「えつー？」

そう言つて女性は小屋の中へ入つていいく。……え？ 『私の小屋』？ じ、じゃあさつきまで喋つてたのはあの人？

「い」の方ですよね？

その壇と共に出てきたのは、先程の銀髪の女性と寝ぼけ眼のアニーだった。

「ふわあ……いやーすまん。ここに逃げ込んだはいいけど、つい寝てもうたわ……」

「ほう……俺が必死になつて探ししている間に、お前は寝てたのか」

「い、いや？ 寝るつもりはなかつたんやで？ で、でもつー

「良かつたよ。お前が無事で

「え……？」

魔物と遭遇してなくて本当に良かつた。ホッと一安心していると、アニーはなぜか怒ったかのような顔をしていた。な、何なんだ？

「いきなりそんな事ゆうなんて、ズルいわ……」

声が小さくて聞こえなかつたが、怒つてこむやうなのでそつとしておこづ。

「お知り合いが見つかって良かつたですね」

会話が途切れるタイミングを待つてくれていたのか、銀髪の女性が俺に話しかける。

「ありがとうございます。え、えーと……」

「私はミシコル＝アストレートと申します」

「あ、俺は黒條白兎と言います」

お互に握手を交わし、もう一度俺はお礼を言った。

「おー一人はどちらまで行かれるのですか？」

「俺はあまり魔界について知らないから、アミーに答えてもらおう。」

「「」は何地方や？」

「「」は……確か　」

二人が話している地名等を聞いても全く分からぬ。誰か俺に地図をくれ。

そういうしている間に話終えたのか、アミーが俺に向かってこう言った。

「「」の近くに町があるから、そこまで行くが」

「また魔物に出くわさないだろ?」

「大丈夫や。次はこの人も一緒やからな」

そう言つて指差したのは、アストレトさん。……え? どゆこと?.

「「」人はこの森全てを管理する凄腕の魔界人やからな」

え? こんなにおつとりした人が?

「それは昔の話ですよー! 今は強くありませんからー!」

「何言うてんねん! こないだも襲いかかってきた野獣族を次々となぎ倒してたやないか!」

照れたように笑うアストレトさん。いや、あの狼とか相手に余裕なの?

すると、アストレトさんは数冊の本を買い物バックのような鞄に入

れると、ドアを開けてこう言った。

「 も、行きましょうか？」

その言葉に頼もしさと一抹の不安を抱えながら、俺たちは再び森へと進んでいくのだった。……大丈夫かコレ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5544x/>

俺と勇者と魔王の伝説作り！！

2011年10月27日17時11分発行